

**プロジェクトA:春日西中学校区 中学校発地域情報誌“Nebula”の発行****概要**

コミュニティ・スクール（地域運営学校）である春日市立春日西中学校にて、「地域サポート本部」と名付けられた学校支援の実働組織を主体とし、“Nebula”（ネビュラ）と題する中学校発のコミュニティ誌を作成した。これは、「学校便り」「学校ボランティア便り」「地域情報誌・ミニコミ誌」の性格も併せ持ったものである。中学校・中学生の活動報告のほか、ボランティア・地域住民が地域内を取材して記事にしたり、地域内マップの掲載・自治会等の社会教育イベント等の紹介・資源回収の曜日と場所などの役立つ情報、更には中学校区内の2つの小学校についての記事を掲載し、「地域住民が目を通したくなる」メディアにすることを目標にしてきた。制作には、地域サポート本部事務局（学校支援の実働部隊）、中学校の教員（地域連携担当主任教諭）、ボランティア、春日市教育委員会社会教育課職員（オブザーバー）が関わり、当団体（USEC）の支援のもとで制作チームを組織した。

取材・進行管理・記事制作・編集等のノウハウを、次年度以降はチームが独力で行えるよう指導し、第1号（Nebula 2010 年秋号。10 月発行）はモデルケースとして、第2号（Nebula 2011 年春号。2 月発行）はトレーニングケースとして位置づけた。また、本調査研究は「事業の立ち上げ」を目的とするため、年度内に2度の発行を行い、その作成方法および活用方法について地域住民・学校関係者のノウハウ蓄積をサポートし、地域内の住民・企業・商店等が今後の継続発行を経済的に支える仕組みを作ることに重点的に取り組んだ。

**地域の問題点とその解決策**

福岡県春日市は、教育委員会が「学校を中心としたまちづくり」を掲げ、市内全小中学校のコミュニティ・スクール化を推進している。実際、市内の各学校で様々な学校・地域・家庭が連携した活動が行われているが、関わる地域住民はまだ限定的であると言えよう。特に、新興住宅地であり住民の入れ替わりも多い春日西中学校の学区では、若い世代（20～40代）を中心とした地域住民が「コミュニティ」に参加しにくいことが課題として認識されていた。

そこで本研究では、若い世代にも役立つ地域情報を「学校発のコミュニティ誌」という形で冊子として配布し、その中でコミュニティ・スクールの活動を周知することを企図した。最近、市街地等でフリーペーパーを手にする機会も多く、生活に役立つ地域情報誌であれば「地域・学校のことを含めて知ってもらえる」と考えたからである。また、小学校・中学校等で「学校の情報」と「地域の情報」がひとつになった広報誌を配ることで、仕事などで忙しく地域の情報に目が向きにくい世代に対しても社会教育的なアプローチが行えるものと考えた。

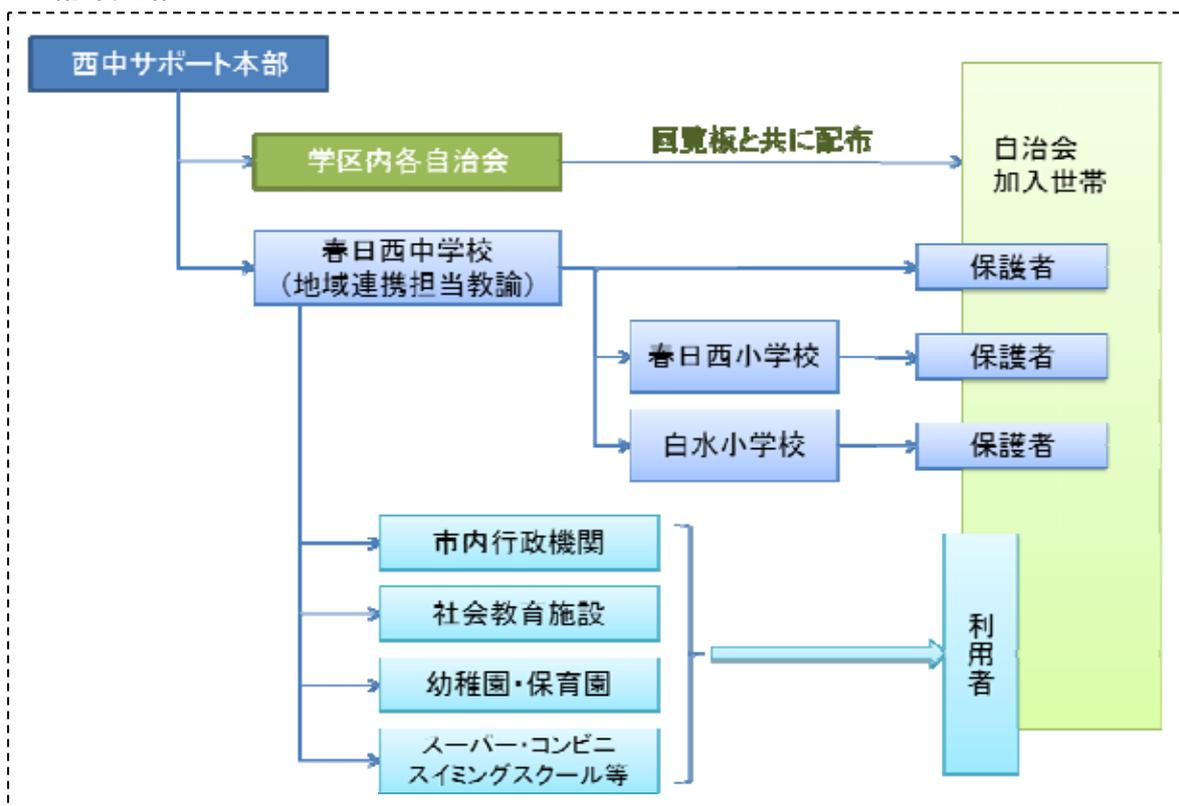
成果物および配布

制作物	Nebula 2010 秋号（2010 年 10 月発行 / A4 版 20 頁 / 11,000 部配布） Nebula 2011 春号（2011 年 2 月発行 / A4 版 24 頁 / 11,000 部配布）
配布先・配布方法	春日市立春日西中学校の通学区内 ・自治体加入世帯への回覧板を通じた配布（約 8,000 世帯） ・中学校 / 域内小学校（2 校）における家庭数配布（約 2,000 世帯） ・公民館、行政施設、社会教育施設における配布（校区外も） ・地域内商店等のうち協力を得られた場所

Nebula2011 春号表紙



配布経路



配布については、普段から地域との関係を構築している、中学校の地域連携担当教諭が中心に行った。学校運営協議会を通じて各自治会の役員と予め調整できていたため、自治会を通じた各世帯への配布も円滑に行われた。

また、小中学校における保護者への配布や、地域内の様々な行政・教育・商業施設で配

布することで、自治会に加入していない世帯にも届けることを企図した。小中学生の子どもを持つ、社宅・賃貸住宅に居住する住民の自治会加入率が低く、地域社会のネットワークからこぼれ落ちている状況を改善するために、学校や幼稚園・保育園での配布にも力を入れたものである。

自治会だけでなく、学校が地域社会作りに貢献することによって、従来「地域コミュニティ」に参加してこなかった住民層に情報を届けることが可能になったと言えよう。

## 地域の教育力強化への貢献

### (1) 学校と地域、さらには P T A が連携して広報を行う基盤が確立した

春日西中学校では、これまでも学校のオリジナルホームページを地域サポート本部が作成するなど、地域に向けた広報を学校・地域が協力して行っていた。今回は、学校から地域に向けた情報に加え、PTA や学区内自治会から地域住民に向けた広報を統合した情報誌を作ったことで、学校・PTA・地域が連携して広報を行う基盤が確立したと言える。その具体例として、2010 年度の 2 月には、2011 年度の PTA 広報予算の一部を“Nebula”の発行経費に充当し、地域内の情報をさらに一元化することが計画されている（2010 年度は、“Nebula”とは別に PTA 広報誌が独自に作られていた）。

春日西中学校ではこれまで、学校と PTA の協力、学校と地域の協力は実践されていたが、地域と PTA の関係は希薄であった。今回の“Nebula”の発行を通じて、地域サポート本部と PTA が「広報」を通じて協力しあい、地域の教育力を高めるきっかけが出来たと言える。

### (2) 小中連携への寄与

今回、計画段階から「地域内の中学校と小学校について地域に知ってもらう」ことを課題の一つに挙げ、“Nebula”の発行にあたっても地域内の小学校に協力を要請した。しかし、学区内の 2 つの小学校はコミュニティ・スクールへの取り組みに差があり、当初は「中学校が何か新しいことをやっているらしい」といったとらえ方で、積極的な協力姿勢は見られなかった。そのため第 1 号では、各小学校の取り組み紹介ページを割愛し、校長へのインタビュー内容のみを掲載することとした。

しかし第 1 号が配布され、地域内からの反響が得られると、各小学校でも「自分たちの取り組みをもっと地域に知ってもらいたい」との声があがり、第 2 号への積極的な協力が見られるようになった。これを足がかりに、今後は地域内小学校の PTA や教員などを巻き込んだ制作が企画され、地域内に向けた広報・地域作りといった側面での小中連携にも貢献していけると考えられる。

### (3) 制作スタッフの組織化

この“Nebula”の制作に関して、USEC のサポートを受けながら自律的に制作を行った第 2 号では、地域サポート本部の副事務局長であり、PTA の副会長でもある杉浦しのぶ氏が編集長を努め、様々なボランティアを巻き込んだ制作チームができた。この制作チームは、春日市の家庭教育学級の受講生だった人たちのボランティアが中心となって構成された。

ボランティアの方々は、もともと「西中ステーション」と名付けられた地域内の社会教育の取り組みに参加しており、西中との結びつきが強かった。そのため、学校や地域に対する理解が高いことは大きなメリットとなったが、多様な地域人材が制作に関わる機会が少なかったことは反省点と言わざるを得ない。この点、校長は次年度以降、PTA や自治体、小学校の PTA など様々な組織と連携して、より多様な地域人材が関わって“Nebula”の制作を行えるよう体制の整備を考えている。

また、杉浦氏を始めとするボランティアは、「えがおの会」という任意団体としてスタッフを組織化し、“Nebula”の制作に必要なスキルを持った人材を募集している。第 2 号で、実践的にレイアウト等を行ったボランティアも「えがおの会」に所属し、自分の趣味のパソコンスキルを活かして“Nebula”の制作を行った。学校を中心とする地域人材への声かけと、制作のためのスキルを持ったボランティア集団が連携することで、より継続性の高い取り組みに発展していくことが期待される。

### (4) 社会教育・生涯学習との連携強化

“Nebula”の紙面上で、地域内の社会教育施設や生涯学習団体を紹介し、その中で制作チームとそれらの団体との接点が生まれた。各地区の公民館で行われている社会教育活動と、学校が独自に行っている「星雲タイム」(教員や学校外からの講師が開講し、生徒だけでなく地域住民も参加できる公開型授業)との交流も生まれた。

## 制作のプロセス

### (1) 編集会議等の概要

7/13	キックオフミーティング	森松地域サポート本部事務局長、杉浦、濱田校長、中本教諭、玉井教諭、平林
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクト概要の説明(事務局長・校長・USEC からの挨拶)</li> <li>・今後の進め方の目安(USEC からのレクチャー)</li> <li>・関わるメンバーの自己紹介</li> <li>・掲載内容のアイデアを出しあう</li> </ul>	
7/27	第 1 回編集会議	森松、杉浦、濱田、玉井、田崎、金丸、平林、他ボランティア数名

	・台割の決定 ・それぞれの役割分担の決定	
8/17	第 2 回編集会議（学習会）	森松、杉浦、濱田、玉井、田崎、金丸、平林、他ボランティア数名
	・取材、情報収集などの進捗管理 ・USEC からのレクチャー	
9/3	第 3 回編集会議	森松、杉浦、玉井、金丸、平林、他ボランティア数名
	・原稿執筆状況の進捗管理 ・配布の手配についての状況確認	
9/17	第 4 回編集会議	森松、杉浦、玉井、金丸、平林、他ボランティア数名
	・原稿執筆状況の確認 ・残りの作業の確認と再度の役割分担	
9/28-29	Nebula 2010 秋号入稿直前作業	森松、杉浦、濱田、玉井、田崎、金丸、平林、他ボランティア数名
	・入稿直前のチェック	
10/15	Nebula 2010 秋号反省会 Nebula 2011 春号キックオフミーティング	森松、杉浦、濱田、玉井、えがおの会メンバー、平林
	・2010 秋号の反省点 ・2011 春号に向けた人材確保および主な内容についての議論	
11/6	第 1 回編集会議	森松、杉浦、濱田、玉井、えがおの会メンバー、平林
	・台割の決定 ・それぞれの役割分担の決定	
11/23	第 2 回編集会議	森松、杉浦、玉井、えがおの会メンバー、平林
	・取材、情報収集などの進捗管理 ・USEC からのレクチャー	
12/7	第 3 回編集会議	森松、杉浦、濱田、玉井、えがおの会メンバー、平林、宍戸
	・制作上の質問への対応 ・今後作り続けるためのデザイン素材の制作について打ち合わせ	
12/21	第 4 回編集会議	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・制作上の質問への対応</li> <li>・取材、情報収集などの進捗管理</li> </ul>	
1/7-8	第 5 回編集会議（学習会）	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・編集・取材・撮影方法に関する学習会</li> <li>・進捗管理</li> </ul>	
1/21	第 6 回編集会議（学習会）	
	・Microsoft Publisher を使った DTP に関する学習会	
2/5	Nebula 2011 春号入稿直前作業	
	・原稿の最終チェック	
2/17	Nebula 2011 春号反省会	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・反省会</li> <li>・2011 年度に向けた方向性について</li> <li>・PTA との連携について</li> <li>・今後の広告営業について</li> <li>・制作体制について</li> </ul>	

## (2) 制作のプロセス

“Nebula”を作成するにあたって、最初に議論したのがページ構成すなわち台割である。以下に示したように、7月27日の第1回編集会議では、各ページの内容の大まかな方向性のみを決定した。それぞれ担当者が、次回までに具体的な内容（テーマ）を提案することにした。

### 第1回会議（7月27日）時点の台割および役割分担

頁	分類	内容	次回までの担当
1	表紙		
2	巻頭	Message	平林 (仮組み)
3		目次	
4	記事	学校企画	玉井 (企画)
5		学校企画	
6	記事	学校企画	森松・杉浦 (企画)
7		サポート本部企画	
8	記事	サポート本部企画	森松・杉浦 (企画)
9		サポート本部企画	
10	MAP	防災・防犯マップ	田崎・杉浦・高田 (企画)
11		防災・防犯マップ	
12	記事	PTA 企画	杉浦 (企画)
13		PTA 企画	
14	小学校	春日西小学校	平林 (仮組み)
15		白水小学校	
16	地域	自治会活動紹介	平林 (仮組み)
17		地域施設・地域サークル活動などの紹介	

18		地域イベントカレンダー	平林 (仮組み)
19			
20	表4	広告？	

第 2 回編集会議では、それぞれ担当がページごとのテーマを提案した。前回の案との相違点は、「校区内小学校のページを作る」という予定だったものを「コミュニティ・スクールってなんですか？」という内容に変更した。これは、新しい企画（サンプルが無い状態）について小学校に協力を求めにくいという学校側の事情によるものであった。そこで、コミュニティ・スクールについて、中学校および小学校 2 校の校長が住民の質問に答えるという形で構成し、小学校の負担を軽減した形で協力を依頼することとなった。

### 第 2 回会議（8 月 17 日）時点の台割および役割分担

頁	分類	内容	次回までの担当
1	表紙		デザイナー主導で作る
2	巻頭	メッセージ	平林 (仮組み)
3		目次・関わった人からのメッセージ	
4	記事	中学校へようこそ～星雲タイムへのご招待～	玉井 (企画)
6		がんばれ西中生～野球部の活躍～	
7			
8	記事	ボランティアが学習をサポート～土曜星雲塾～	森松・杉浦 (企画)
9			
10	MAP	泉・下白水北・下白水南・昇町(一部) みんなで作る地域便利マップ	田崎・杉浦・高田
11			
12	MAP	上白水・白水が丘・天神山(一部) みんなで作る地域便利マップ	田崎・杉浦・高田
13			
14	記事(PTA)	12 月 18 日は弁当の日	平林 (仮組み)
15			
16	記事(Other)	コミュニティ・スクールって何ですか？	Question を考える 仮組み
17			
18	地域	地域イベントカレンダー	イベントを整理 (森松)
19			
20	表4	広告？	

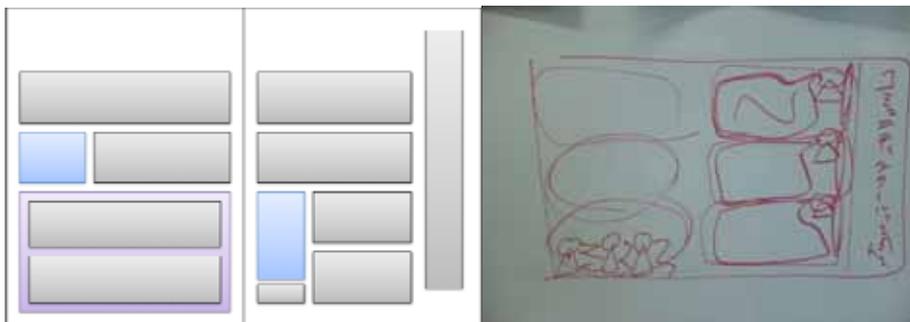
### 第 2 回会議（8 月 17 日）時点でプロジェクト参加者に配ったレイアウトサンプル



内容が決まる前に、大体のレイアウトを組み、必要な素材・情報や書くべき原稿の文字数の目安がわかるようにした。

このような広報誌を制作するにあたっては、編集・制作・執筆の経験が少ない参加者でも自分が行う仕事・役割をイメージできるように、細かい台割・役割分担・誌面イメージ等を予め示して共有することが大事である。

また、以下のように、だいたいの誌面構成をレイアウトし、どこに何を何文字くらいで書くかを示すと、多くの人々が執筆者になることができるようになる。



この写真のようにレイアウトイメージを書いて編集会議を行った。

### インタビューメモの作成

第3回編集会議以降は、イメージを具体化しながら、それぞれの立場で取材を行った。取材経験のない参加者のために、例えば以下のようなインタビューメモを用意した。

コミュニティ・スクールとは一体何なのですか？

今村校長 300字未満

日本の小・中学校は、全てコミュニティ・スクールなんですか？

白水小校長 180字未満

なぜ春日市は学校をコミュニティ・スクールにするのですか？

白水小校長 210字未満

学校がコミュニティ・スクールになると、どんな良い点があるのですか？

濱田校長 275字～325字

地域社会は、コミュニティ・スクールにどんな責任を負っているのですか？

今村校長 275字～325字

「教育は難しい」と聞きますが、素人が学校に関わるのは難しいんですか？

濱田校長 275字～325字

各学校から一言ずつ

各校長 75字～89字

このように、具体的な質問および文字数を予め設定することで、インタビューから原稿を作成する際の目安になるほか、インタビュー者が字数に合わせて内容を調整するという効果も見込める。

### 冊子に使用する写真

冊子に使用する写真は、本格的な機材を持ち、写真を趣味とする教員が主に撮影を行った。春日西中学校では、普段から広報・報告のためにデジカメで様々な行事の写真を撮る習慣があり、素材にはあまり不自由しなかった。



教員が撮影した写真



制作メンバーが撮影した公民館の写真

その他にも、編集会議において様々な工夫を行ったので、以下に簡単に紹介する。



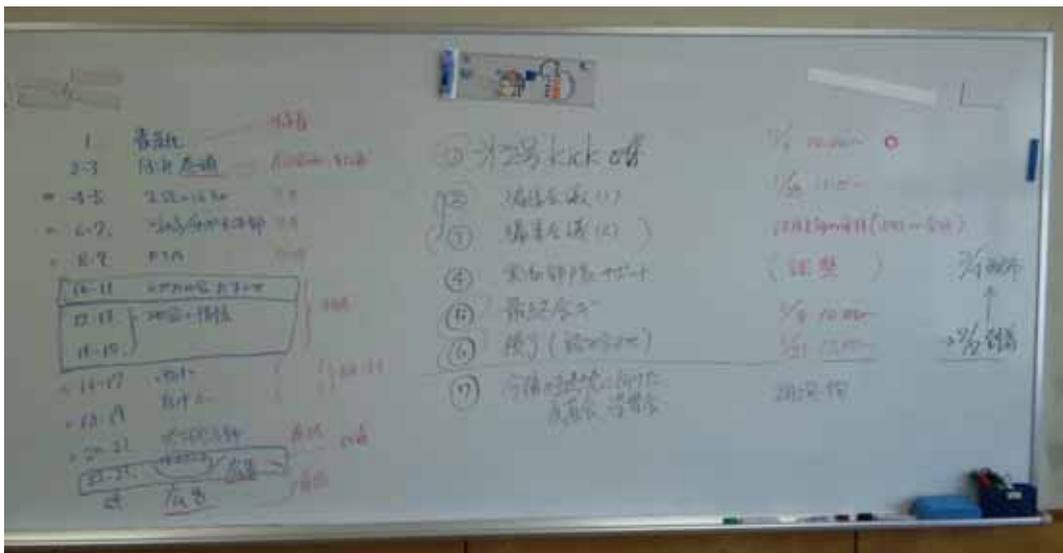
この写真のように、サンプル誌面を作成し、そこに何を書くかを編集会議で共有すると、編集経験が少ない人でも「全体像の中で、自分が何を書けば良いのか」をイメージすることができる。

同様のミニコミ誌を作る際には、既存の“Nebula”を始め、類似の冊子をこのようにコピーして参考にすると良い。



この写真のように、ページ割と内容、進捗や役割分担を毎回全員が見えるようにホワイトボードに書き、打ち合わせの場で全ての項目を埋めていくという方法をとった。

これによって、全体がどのように進んでいくのかを共有しながら進めることができた。



この写真は、第2号キックオフ会議の時のもの。その後のスケジュールをキックオフ時に全て決め、多様な制作メンバーが予定を立てやすいように工夫した。

### 制作チームで自律的に企画を立てる

第 1 号 (Nebula 2010 秋号) の作成によって、制作の全体像がつかめたため、第 2 号 (Nebula 2011 春号) においては企画段階から制作メンバーが自律的に関わった。その結果として、より地域に密着した内容のミニコミ誌になっていった。

### 第 2 号の台割案 (12月7日時点)

頁	内容	コメント	担当
1	表紙	校長の要望を受けてデザイナーと協議の上で見直し (12/7 にデザイナーとの打ち合わせ)	平林 (宍戸)
2	巻頭企画	今後も、人に焦点をあてる方針で 第 2 号:「チーズケーキ」(西中出身ユニット) 次回までにインタビューガイドを作る	えがお
3	目次		
4	タイトル未定	ボランティア隊の活動(生徒会が中心に書く) 何をやるかを具体的に示しながら、「ボランティアに来てほしい所 は連絡ください」というメッセージを載せる	玉井
5		～生徒会の取り組み/文化部/新人戦～	
6	タイトル未定	地域清掃ボランティア ここに来てくれという要望が欲しい	玉井
7		～地域後援会の囲み記事～ ペットボトルキャップ/切手/インクカートリッジ/ベルマーク/電池 …何をどこに持って行けばいいか?	
8	食育	弁当の日・密着ドキュメント	杉浦 + PTA
9			
10	くらし	廃油石けん作り	杉浦
11		家庭でできる廃油石けん	
12	地域情報マップ	地図	杉浦
13		地域広告(8 枠) + 博多南駅時刻表	
14		校区内ストリート紹介(手書き)	
15			
16	春日西小学校	既存レイアウトを元にして、掲載内容は小学校主導でつくる(今村 校長、これから取材)	西小
17			
18	白水小学校	おやじの会によるキャリア教育	えがお + 白水小
19			
20	地域活動	地域行事一覧(2月～7月)	森松
21		学校行事も掲載(来年の学校行事は12月の職員会議で確定)	玉井
22	制作者とのコミュニケーション	上部:編集後記や、制作者と読者のコミュニケーション、 校長の紹介、プレゼントコーナー、取材のこぼれ話	杉浦
23		下部:広告	森松
24	広告		森松

## 今後も使えるデザイン素材の作成



これらは、nebula の編集・制作に必要なイラスト素材である。

今回は、デザイナーがこれらの素材を、今後も使い続けられるように配慮して作成した。

多くの地域で、ボランティアを中心に広報誌を作成する場合に、継続的にデザイナーが関わることは難しいと考えられるので、デザインの素材やテンプレートなどの形で、非専門家が使える資源を残していく工夫が必要であろう。

実際、nebula の第2号は、職業編集者が作成したテンプレートに沿って、編集未経験者が全てのレイアウトを行った。

地域に即した素材があると、読者にも親近感を与えられる。

<p><b>★ 濱田歯科医院(矯正／一般／小児)</b></p>  <p>ここに見出しが入ります (全角10字) ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。(全角20字×6行)</p>	<p><b>★ レストランテ玉井</b></p>  <p>ここに見出し (全角12字) ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。(全角14字×6行)</p>
<p><b>★ ペットショップ杉浦～白水小そば～</b></p>  <p>ここに見出し (全角14字) ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。ここに本文が入ります。 ここに本文が入ります。(全角17字×6行)</p>	<p><b>★ Dining Cafe “Forest Pine”</b></p> 
<p><b>★ 濱田歯科医院</b></p> 	<p><b>★ レストランテ玉井</b></p> 
<p><b>★ ペットショップ杉浦</b></p> 	<p><b>★ Dining Cafe “Forest Pine”</b></p> 

**JR博多南線 博多～博多南 時刻表 (H23.1.8現在)**

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
<b>[上り]</b> 博多南 ↓ 博多	40	12 36 55	20 48	13	06	05	06	01	01									
<b>[下り]</b> 博多 ↓ 博多南	40	12 36 55	20 48	13	06	05	06	01	01									

このように広告サンプルを予め作ることで、地域内で「広告のお願い」をすることが可能になった。

## 得られた知見とノウハウ

人材を集める	<p>年度が始まってから採択が決まった事業のため、前年度から関わる人材を募集することができなかった。そのため、これまで学校に関わってきた人、ないしその知り合いといった狭い範囲で参加者を募ることになり、拡がりが小さかった。</p> <p>このような広報誌に関してはより広い年代が関わる必要があり、大学生などの若者や、小学校・中学校の PTA 関係者を巻き込む準備が必要である。</p> <p>また「これから作るもののサンプル」があり、実際に関わる人が行う作業が見えていれば関わりやすいが、何も無い状態で参加者を募る場合「なんか難しそう」という印象から参加者が増えないことも考えられる。</p> <p><b>作る物 / 関わり方 / 作業内容を明確にし、事前に広い世代に呼びかけ、PTA を巻き込むことが、豊富で多様な人材を集めるために重要と考えられる。</b></p>
年代・性別などによるコンフリクトをどう乗り越えるか	<p>学校が中心となる広報誌に、PTA / ボランティア / 自治会など複数のステークホルダーが関わることに伴い、様々な年代・性別の人たちが協力しあって1つの物を作る形になった。</p> <p>これまで、協議会などで年代・立場等の異なる人が一同に会することはあっても、それぞれが担当する役割・仕事が異なっていたため、表立ったコンフリクトは生まれにくかった。しかし、1つの広報誌を作る中で、考え方・価値観の違いが表面化し、時として感情のすれ違いが起こることもあった。だが、様々なコンフリクトを乗り越えて1つの成果にたどり着いた時には、相互の理解が増していることも確かである。途中で挫折しないという前提があれば、このようなコンフリクトを「解消」するばかりでなく、共に乗り越えていくことでコミュニティの連帯が深まるとも言えよう。</p>
制作・編集ルールを徹底することの難しさ	<p>質の高いメディアの制作には、制作・編集においてルールを徹底することが重要である。このことは、制作段階において関わる人たちに繰り返し伝えてきたが、同種の業務経験が無いことからなかなか定着しなかった。</p> <p>今回は結果的に、制作・編集ルールを緩め、制作物の質にこだわらないことによって前に進めることができたが、業務経験が無い人たちがメディア作りに携わる際の、適切なクオリティ管理の方策を考える必要がある。</p>

<p>学校が基軸になることのメリット</p>	<p>学校（中学校）が広報誌発行の基軸になることは、徒歩・自転車などを使った生活圏の範囲と比較的近いこと、小学校 2 校 + 中学校 1 校の合わせて 3 校のリソースを使えること、学校に關与する様々な事業者（塾・医院・地元商店など）から広告を出してもらいやすいなど、様々なメリットがある。</p> <p>地域コミュニティ誌には様々な形態があるが、このように学校が中心となって地域広報を担い、新しい公共型コミュニティを作る軸になっていくことは、大いに意義があると考えられる。</p>
------------------------	---

## 学校側の総括

この“Nebula”は、コミュニティ・スクールとしての学校が音頭を取り、その支援実働組織である「西中サポート地域本部」が発行・編集の主体となって作られた、学区内限定の地域情報紙です。内容も学校や地域に密着したものであり、学校としての取組や、活躍した生徒の活動紹介、PTA の活動紹介、自治会の活動紹介、学区内の小学校のコミュニティ・スクールとしての活動紹介など、地域における様々な情報を 1 つの冊子に集約したものです。学区内の街歩きスポットの紹介、さらには資源回収の案内や、地域行事のカレンダーなども掲載されていて、「地域内の便利帳」の役割を担っていくことが企図されています。更に画期的な点は、学校独自の予算だけで作るのではなく、地域の企業・商店・医療機関・学校・学習塾などの「広告出稿」という形での支援を得て、比較的立派な「保存版」の冊子を作ったところではないでしょうか。文部科学省の事業を受けて 1 年間だけ作るのではなく、地域の様々な支援を得ながら「継続性のあるコミュニティ活性化ツール作り」を行うことが大切なのです。

“Nebula”には、「世代をつなぐ」という役割も期待されています。学校が地域の情報を発信することで、普段あまり地域情報に触れることのない、小中学生の子どもを持っている親や、これから小学校に子どもが入るような若い親にも興味を持ってもらえる可能性が高まるからです。町内会報や自治会の回覧板とは違ったものとして、若い人たちに受け入れられるのではないかとということで始めました。

“Nebula”は、学校で地域情報を取りまとめて、地域に流していくハブのような役割を果たしています。学校が音頭をとってコミュニティ・スクールの推進し、学校を中心としたまちづくりを進めていくスタイルの中では、こういった取り組みも非常に価値があると言えるでしょう。

（春日西中学校 地域連携担当主任教諭 玉井正昭先生）